「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
（当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください）

	令和元年 9 月 28 日
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏　名	横山実玖歩

１．派遣国・場所（○○国、○○地域）

愛知県犬山市、霊長類研究所

２．研究課題名（○○の調査、および○○での実験）

比較認知科学実習

３．派遣期間（本邦出発から帰国まで）

平成 31 年 4 月 1 日　～

４．主な受入機関及び受入研究者（○○大学○○研究所、○○博士／○○動物園、キュレーター、○○氏）

京都大学霊長類研究所、友永雅己教授

５．所期の目的の遂行状況及び成果（研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由）

写真（必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの）の説明は、個々の写真の直下に入れること。
別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

比較認知科学とは、ヒトを含む様々な動物の認知機能を探ることで「こころ」の進化を明らかにする学問である。思考言語分野ではヒトに最も近縁な種であるチンパンジーを対象に認知実験をおこなっている。比較、という言葉が使われているが、実験対象の種を単なるヒトとの比較対象と捉えて研究をおこなう訳ではない。彼らの持つ認知機能が、彼らの生態の中でどのように進化し、役立ってきたのかを理解することが重要であり、その結果としてヒトの「こころ」特徴を明らかにすることができる。2019 年 4 月から半年間、実験の手法や、チンパンジーを扱う方法を学んでいく中で、この学問の難しさや楽しさ、やりがいが少しずつ分かるようになってきた。本実習は、日々の実験への参加に変える形で実施された。

実験は平日のほとんど毎日、午前と午後の 2 回に分けておこなわれており、各回 3-4 個体のチンパンジーが実験室にやってくる。現在はタッチパネルやアイトラッカー、実物を使った選択実験などがおこなわれている。ヒトを対象にした認知実験と大きく違うのは、言葉による説明ができない点である。実験者の調べたいことが結果として表れるような課題を考えるのは容易ではない。苦労して考えても思うような結果が出ないこともあり、課題に取り組む様子を注意深く観察しながら少しずつ課題を改良していく。言葉でコミュニケーションを取ることのできない動物の「こころ」の動きを、課題における反応時間や正答率などを指標にして明らかにする過程は困難である一方でとてもワクワクするものである。

日々の実験は放飼場にいるチンパンジーの名前を呼ぶところから始まる。すぐに来てくれることもあるが数十分名前を呼んでも来てくれないこともある。実験室に来ても、すぐに課題に向かう個体もいれば、なかなか集中できない個体もいる。面白いのが、他の個体の様子に影響を受けていることが多いということだ。群れで喧嘩があった後だと落ち着かず名前を呼んでも来なかったり、群れの仲間の声が聞こえてくると実験に集中できなくなったりすることがある。群れで生活しているチンパンジーならではの姿であり、とても興味深い。一筋縄ではいかないところが大変ではあるが毎日いろいろな行動を見ることができ、新しい発見がたくさんある。

チンパンジーを扱うことは、一つ間違うと人もチンパンジーも危険にさらすことになってしまうため、緊張の連続である。多くの方の協力によって実験ができているのだということを忘れず、今後も気を引き締めて実験をおこなっていきたい。

図 1　タッチパネル課題をおこなうクレオ

図 2　実験室で横になるクレオ

６．その他（特記事項など）

いつも研究についての指導や実験の補助をしてくださる、友永先生をはじめとする思考言語分野の先生方、技術補助員のみなさまに御礼申し上げます。また実習や学会は PWS の支援を受けて参加しています。感謝申し上げます。